



連載の解説版「もう一つの『発達のなかの煌めき』」は、こちらから見ることができます。
最新の第16回を公開中！

ます。さらに、現代社会において労働がもつてゐる負の側面、人間性を抑圧し、人間発達を阻害する面をもつていてことも同時にとらえる必要があるでしょう。

労働とは？

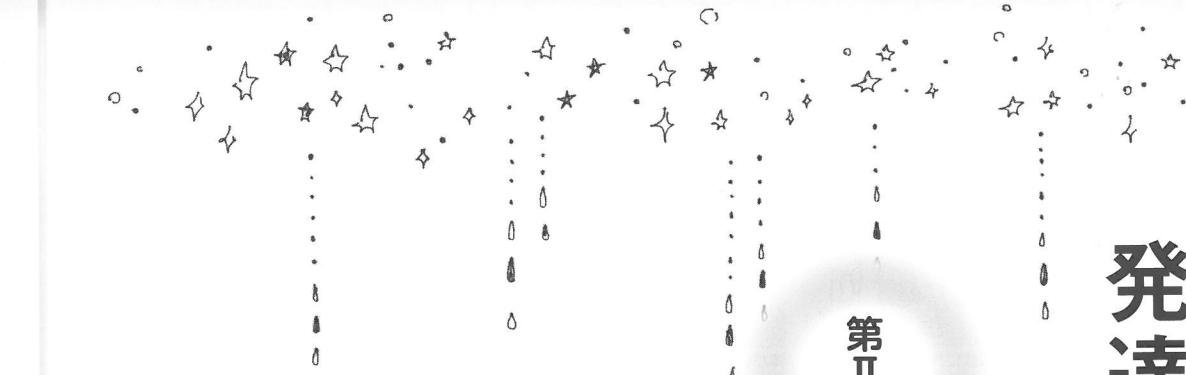
労働とは本来、人間が自分の肉体的・精神的能力を使って外部の自然に働きかけ、自然を変化させて何らかの使用価値を創りだす活動です。『資本論』を書いたマルクスは、「自分の外部の自然に働きかけて、それを変化させることにより、同時に自分自身の自然を変化させること」と述べています。それだけだと全ての動物の行為があまりそうですが、人間の場合には、他の動物とは異なり、明確な目的をもつて自然に働きかけているとも指摘しました。この目的意識ゆえに、人間は労働を通して、「どうしたら、その目的を実現することができるか」を考え、工夫し、反省し続けてきましたのであり、それは、人ととの共同や連帯の力、よりよい道具の開発、予測や計画性といった認識・思考の発達をうみだしていきました。

一人ひとりの「労働観」、働くことへのねがいを尊重するためには、この目的を添えながらも一針一針縫いつける

ます。さらに、現代社会において労働がもつてゐる負の側面、人間性を抑圧し、人間発達を阻害する面をもつていてことも同時にとらえる必要があるでしょう。

労働とは？

労働とは本来、人間が自分の肉体的・精神的能力を使って外部の自然に働きかけ、自然を変化させて何らかの使用価値を創りだす活動です。『資本論』を書いたマルクスは、「自分の外部の自然に働きかけて、それを変化させることにより、同時に自分自身の自然を変化させること」と述べています。それだけだと全ての動物の行為があまりそうですが、人間の場合には、他の動物とは異なり、明確な目的をもつて自然に働きかけているとも指摘しました。この目的意識ゆえに、人間は労働を通して、「どうしたら、その目的を実現することができるか」を考え、工夫し、反省し続けてきましたのであり、それは、人ととの共同や連帯の力、よりよい道具の開発、予測や計画性といった認識・思考の発達をうみだしていきました。



第Ⅱ部

発達的共感が創り出す実践

—歴史に学び、今をみつめ、
未来を創る

発達のなかの 煌めき

白石正久 白石恵理子

白石正久 まさひさ／1957年、群馬県生まれ。小児科病院の発達相談員などを経て、現在龍谷大学名譽教授。

白石恵理子 えりこ／1960年、福井県生まれ。大津市発達相談員などを経て、現在滋賀大学教育学部教授。

第8回 労働の価値とは何か ——幸福感でつながる喜びを

ここまで「自然」「文化」を切り口にして、障害のある人の成人期における労働について、その人自身の「労働観」をとらえることの必要性について書きました。「がんばって働いてお給料をもらう」「働くことで社会に貢献する」といった一般的な価値観だけで労働の意味をとらえることによって、かえって障害のある人の労働の価値を排除してしまう可能性があると考えたからです。障害が重い人の場合は、「作業が難しい」「能力的に難しい」とみなすではなく、まずは、その人にとつての労働の意味を問うていくことが必要だと思います。一人ひとりの「労働観」は、その人の働くことへのねらいと言いかえてもよいでしょう。

一方で、障害の有無にかかわらず、労働のもつ普遍的価値とは何かを考えることは重要です。労働に限りませんが、常に普遍性と個別性の両面から考えることが求められます。両者は相矛盾することも多いのですが、だからこそ試行錯誤につながり、生きた実践をうみだしていく

のちがいをおさえることが不可欠となります。たとえば「誰かのために」という目的はとても大切ですが、発達的に二、三歳頃にある人にとっては、その「誰か」は、具体的な「誰か」、顔の見える「誰か」であることが多いのに対し、発達的に「四歳の節」をこえてくると、少しずつ、直接は知らないけれど、「誰かが喜んでくれるかなあ」「誰かの役に立つかなあ」と考えるようになつていきます。それは、労働の社会的価値を認識しはじめる姿とも言えるでしょう。

先日の全障研滋賀支部での学習会では、県立特別支援学校高等部での実践レポートから学びました。肢体不自由をあわせもつ生徒も含めた、発達的に乳児期後半から三歳頃の時期にある生徒たちに対する「作業学習」で、草木染めに乳児期後半から三歳頃の時期にある生徒たたりくんだそうです。校内にたくさん生えていたドクダミを探るところからはじまりました。そして、染めた布でてる坊主やうさぎの人形をつくったということです。人形の顔をつくる際には、教師に手を添えながらも一針一針縫いつける

こと、それぞれに個性的な「顔」ができることがあります。そのなかで、最初は「〇〇先生にあげたい」と言っていた生徒が、できあがつたうさぎを実際に先生にさしだしたものの、「やっぱ無理……」と自分のかばんにしまいこんだそ Rodgers がいと言いかえてもよいでしょう。

レポートを書いた長友さんは、「誰かのために」というねがいを教師が押し付けていなかつたか、まずは自分が満たされる思いになるからこそ、人に気持ちを向けていけるのだろうと反省します。

創造の喜びといつた自分にとつての幸福感があるから、それを大好きな人とわかちあうことの大喜びを教えてくれるし、大好きな人に喜んでもらえたという嬉しさが「もつとつくりたい」というねがいにもつながっていくのでしょうか。眞の労働とは、わかちあいでもあり、それはこうした幸福感でつながることから始まると思うのです。学校での「作業学習」がともすると、卒業後の直接的準備や訓練に終始したり、「つくること」だけに焦点をあてたり、「誰かのために」を最初から押し付けてしまったりしがちですが、幸福感でつながる経験をまずはたっぷりと実感できることも大切でしょう。